

『ノイエス・ドイチュラント』紙の

リリー・ヴェヒター関連記事に寄せて

木戸衛一

以下にご紹介するのは、ドイツ民主共和国（DDR）の国家政党、ドイツ社会主義統一党（SED）の中央委員会機関紙『ノイエス・ドイチュラント』（新しいドイツ、の意。以下ND）1952年3月8日付に掲載された、西独の女性平和活動家、リリー・ヴェヒター（Lilly Wächter）に関する2つの記事である。言うまでもなくこの日は国際女性デーで、NDには、一面トップの論説「女性と母親の力」、SED中央委員会の国際女性デーへの祝辞を初め、ドイツ民主女性連盟（DFD）・国際民主女性連盟（IDFF）の活動や、平和を求める各国の女性運動の報告などが満載されている。

「リリー・ヴェヒター—勇敢なドイツ愛国女性」を書いたケーテ・バイアー（Käthe Beyer）は、NDにいくつか文化関連の記事を書いている。また、ヴェヒターを讃える詩を書いたヘッダ・ツィナー（Hedda Zinner）は、リヴィフ（現ウクライナ）生まれの作家・女優・ジャーナリストで、ヴァイマル共和国末期から共産党系の新聞・雑誌に詩を発表、1935年、モスクワに亡命した。戦後は東ベルリンで活動、DDR国家賞（1954年と1989年）やカール・マルクス勲章（1980年）などを受賞している。

リリー・ヴェヒター自身については、本誌第8号に掲載されたウルズラ・シュレーター「旧東独女性組織を回顧して」の第3章、および第9号に全訳されたDDRの法律家、フリードリヒ・カール・カウルの『私は真実を述べた リリー・ヴェヒター—平和のための闘いにおけるドイツ女性の模範』でその足跡を窺うことができる。そこで本稿では、ヴェヒターに関する基本的な事実を確認し、若干の背景説明をすることにしたい。

リリー・ヴェヒターは、1899年、現バーデン＝ヴュルテンベルク州のカールスルーエに生まれ、結婚後の1934年、そこから南南西に30キロほど離れたラシュタットに移った。ナチスの時代、彼女は「半ユダヤ人」として迫害を受け、母をアウシュヴィッツ絶滅収容所、継父をテレージエンシュタット強制収容所、異父弟をブーヘンヴァルト強制収容所で失った。政治的には、1917年に社会民主党（SPD）に入党、戦後も党の活動に携わった。

1947年3月8日、ソ連占領地区で結成されたDFDは、1950年4月、西独でも支部設立に成功した。その活動に加わったヴェヒターは、1951年5月、IDFFによる朝鮮での民間人住民虐殺の調査に参加した。12日間に及んだこの調査には、のべ17か国、21名の女性が同行している。

ヴェヒターは、朝鮮戦争での凄まじい民間人被害に強い衝撃を受け、西独に戻ると、朝鮮で見聞したことを講演で伝えた。米軍による残虐行為の告発は、米軍事法廷から「共産主義のプロパガンダ」と見なされ、1951年10月、「サボタージュおよび占領軍への反乱」

の廉で起訴され、禁固 8 か月、罰金 1 万 5000 マルクの判決を受けた。それに先立ち、同年 6 月 30 日には、SPD から除名処分を下された。

もともと一介の主婦だった女性が、朝鮮戦争の悲劇を目の当たりにし、反戦平和を訴えて有罪判決を受けたことは、ドイツ内外で抗議を巻き起こした。1952 年 1 月、フランクフルト・アム・マインで始まった控訴審は、ナチス統治下の 1933 年国会放火事件に関するロンドン対抗法廷で裁判長を務めた英国人デニス・N・プリットと前述のフリードリヒ・カール・カウルがヴェヒターの弁護人となり、さらに国際的に注目された。結局同年 2 月 29 日の判決で、彼女は禁固 20 日、罰金 1 万マルクを課せられた。

1952 年の国際女性デー当日、ヴェヒターは、シュヴェービッシュ＝グミュント近くのゴッテスツェルにあるヴェルテンベルク女性刑務所で服役中であり、ND が彼女を大きく取り上げたのは、至極当然であった。第二次世界大戦の生々しい記憶を背景に、「戦争とファシズムを二度と許さない」という世論は、東西ドイツで幅広く存在した。1949 年 5 月に西独国家が樹立され、再軍備の議論が始まると、「僕はごめんだ」(Ohne mich) という平和運動が盛り上がっていった。1950 年 6 月 25 日、朝鮮戦争が勃発したことは、欧州における「熱戦」の恐怖に現実味を与えた。

1950 年 10 月、グスタフ・ハイネマン連邦内相(後の連邦大統領)が再軍備に反対して辞任し、ナチス独裁下告白教会を立ち上げ、ヒトラーの「個人的囚人」として、ザクセンハウゼン、ダッハウの強制収容所に繋がれていた牧師のマルティン・ニーメラーは、コンラート・アデナウアー西独首相に対し、再軍備に関する国民投票を求める公開書簡を発表した。ハイネマンはさらに、1951 年 11 月、デュッセルドルフで「欧州平和のための緊急共同体」を立ち上げ、その 1 年後にはキリスト教民主同盟(CDU)を離党し、「全ドイツ国民党」(GVP)を創設する。

西独当局は、これらの活動をモスクワや DDR への加担と見なし、再軍備反対の急先鋒だったドイツ共産党(KPD)および DDR と繋がりのある大衆団体への締め付けを強めた。1951 年 6 月 15 日、4 名の KPD 連邦議会議員は、「非議会的態度」を理由に、20 日の登院停止処分を科せられ、6 月 26 日、ドイツ自由青年団(FDJ)の活動が禁止された。さらに 11 月 23 日、連邦政府は連邦憲法裁判所に KPD の違憲認定を求めて提訴した。このように、リリー・ヴェヒターが朝鮮を訪れ、有罪の判決を下された時期は、西独が再軍備の実現に向けて血道をあげていたのである。

ヴェヒターは、刑期を終えて平和活動を再開、5 月 16~19 日に開かれた DFD 第 4 回全国大会に来賓として出席するなど、DDR で大歓迎を受けた。1953 年 7 月には、西独 DFD の第一議長に選出されたが、1956 年 8 月 17 日、KPD が禁止され、1957 年 4 月 10 日、西独 DFD が解散させられると、彼女は表舞台から退き、1989 年 12 月に亡くなった。リリー・ヴェヒターの存在は、反共主義の政治的雰囲気の中で長らく忘却の彼方に追いやられていたが、現在ではラシュタット市のホームページに、同市ゆかりのユダヤ系市民として、その名が挙げられている¹。

¹ <http://www.rastatt.de/index.php?id=397>

リリー・ヴェヒター — 勇敢なドイツ愛国女性

ケーテ・パイアー 著
木戸衛一 訳

第三次世界大戦の準備に反対する闘いは、日に日に幅広い西独住民を捉えている。新たな戦争は、これまでの二つの大戦以上に、女性と子どもに最も厳しく降りかかるであろうから、西独の女性たちは今日、死と絶滅に抗し、故郷を守る闘いの先頭に立っている。

夫や兄弟の命、子どもたちの幸福のためのこの闘いの最も輝かしい模範になったのは、リリー・ヴェヒターだ。

澄んだ、決然とした眼差し、ときおり文章、演説の特に重要な言葉を強調して両手を握る女性。1951年6月21日、ベルリンにおける「子どもを守る共同体」全独作業会合で、朝鮮での経験を語る彼女を初めて見た時の私たちの印象は、このようなものだった。

リリー・ヴェヒターは、つい数年前まで、バーデンのラシュタットの居心地よい家の世話をし、戦争中は他の何百万の女性と同様、ファシスト支配を「何が何でも」防衛するよう強いられた夫の身を案じるだけだった一介の女性だ。彼女はファシズムが何を意味するか分かっていた。家族はほとんど皆、ヒトラー支配の数年間、強制収容所に身を置いていた。1939年には、兄弟の死を知らされた。SSの殺し屋が、狙い定めて胃を踏みつけたのだ。3日後、彼はブーヘンヴァルト強制収容所で焼かれた。リリー・ヴェヒターの父親は、テレージエンシュタットで餓死し、母親はアウシュヴィッツでガス殺された。両親は1933年以前社会民主党员で、リリー・ヴェヒターも1923年、24歳で入党した。

恐怖の数年間、重苦しい影のようにリリー・ヴェヒターの人生の上のしかかった凄惨な体験を経て、1945年以後、褐色のペストのあらゆる残滓を克服するため全力を尽くすのは、この勇敢な女性にとって、当然すぎることだった。

リリー・ヴェヒターは、1946年、社会民主党に再入党した。反ファシズム闘争の歳月、固く結びついた縁のある党だ。だが、この数年間は彼女の感覚を鋭敏にした。リリー・ヴェヒターは批判的になり、1933年以前党内で彼女も犯した失敗を繰り返してはならないと分かっていた。

リリー・ヴェヒターは1951年5月、17か国21人の女性とともに朝鮮に赴き、真実を求めた。彼女は、ありとあらゆる惨劇、切断された子どもの死体、おぞましい集団墓地を目の当たりにした。彼女は苦しむ朝鮮女性と話をした。そこで彼女は、1分とて黙ってはいられないと悟った。言葉を使えるうちは、西独のすべての人々を同じ運命から守るために語らなければならなかったのだ。

朝鮮から戻るや否や、リリー・ヴェヒターはデュッセルドルフで、西独の新聞・ラジオの代表者の前で朝鮮について話をした。ラシュタットで、デュッセルドルフで、ジンデルフィンゲン、フリードリヒスハーフェン、ニュルンベルク、西独のあらゆる都市で、ドイツの愛国者、リリー・ヴェヒターの警告的・感動的で誓うような声が響くと、ペータース

ベルク〔ボンにある連合国高等委員会〕では直ちに、米国の戦争準備にとっての危険を嗅ぎつけた。この女性には子どもはいない。だが、彼女は、戦争挑発者が朝鮮の運命を整えようとしている全ドイツ女性の息子たちのために闘ったのだ。

どこでも人々が群れをなして、リリー・ヴェヒターが話をする会場に押し寄せると、彼女は演説を禁止された。だが、この勇敢な女性は沈黙しなかった。彼女は集会から出されて逮捕された。するともう翌日には別の場所で、警告の声を挙げるのだ。ペーターズベルクの意味深長なウィンクがあれば十分で、社会民主党の右派指導者たちはリリー・ヴェヒターを党から追放した。だが彼女は、自分が一度正しいと認識した道を動ぜずに歩んだ。

それは、マックロイ〔米占領地区高等弁務官〕にとっては行き過ぎだった。1951年9月6日、「私が朝鮮で見たこと」というテーマの集会が、もう開始1時間前に溢れかえり、警察の遮断にもかかわらず、人びとが会場への道を行こうとした時、リリー・ヴェヒターは逮捕され、ドイツの警察によって米占領軍に引き渡された。「米国占領軍部隊への中傷」により、彼女は米軍事法廷に連行された。

だが、リリー・ヴェヒターは一人ではなかった。彼女の闘い、ドイツの故郷への強い愛情は、何千もの反響を呼んだのだ。逮捕2日後、リリー・ヴェヒターが連行された牢屋の前を2,000人がデモした。「高等米裁判所」とマックロイは、ドイツ各地や全世界からの激しい抗議に覆われた。ルール地帯の鉱員、ハンブルクの港湾労働者、ニュルンベルク、ボン、デュッセルドルフの女性・母親が最後の小銭を貯め、リリー・ヴェヒターのために集めた。数日後、米国は歯ざしりしながら、彼らが払えまいと思っていた1万5,000マルクの保釈金を受け取り、リリー・ヴェヒターを裁判までに釈放した。

真実と平和を擁護したことが「罪」に問われたこの勇敢な女性に対する裁判が、陰険極まりない方法で行うしかないのは明らかであった。米国のスパイたちが、米国の検事総長、マッコリーの有罪事実証言者として紹介された。

何人ものマリオネットにもかかわらず、マッコリーは、リリー・ヴェヒターの罪を立証できなかった。結局彼はシニカルに、リリー・ヴェヒターが朝鮮について真実を述べたかどうかは重要でないと明言した。重要なのは、彼女が在独米占領軍の声望を傷つけたかどうかだけだというのだ。ドイツにも駐留しているのと同じ米軍の兵隊が朝鮮で戦ったからというのがその理由だった。

再び世界中に憤激の嵐が巻き起こった。リリー・ヴェヒターは判決を不服として、控訴した。有名なイギリスの弁護士プリットと、ドイツの弁護士カウル博士が、彼女の弁護を引き受けた。1月10日、控訴審最初の公判日、米国の根拠のない起訴は惨めに崩れた。裁判は延期せざるを得なくなった。米国はもう、あえて公然と姿を現さず、最終判決は文書で伝えると告げた。だが、リリー・ヴェヒターに対する自由の制限は、すべて解かれた。

さっそくりリー・ヴェヒターは、ハンブルクとブレーメンで再び話をした。デュッセルドルフの集会では、すぐに再軍事化への反対を呼びかけた。もちろん彼女は、シュヴァルトツヴァルトのレフフィンゲンで開かれた、再軍事化に反対する国際女性会議に同席した。

この間米国の裁判官たちは陰険に、自分たちのテロ判決を文書で確認した。それは、ドル札や株券よりも強力な女性の口を封じようとするペーターズベルクのお歴々の絶望的な最後の試みだった。彼女には、最上の武器、真実があったのだ。

この恥ずべき試みは、既に失敗している。ドイツ人は、マックロイやマッコリーとは

別意見だ。リリー・ヴェヒターは何百万人のドイツ人を揺り動かし、彼らは今や彼女の側に立って、彼女の自由のために闘い、彼女の仕事を何千倍も強め続けている。こうして、過去の傷はようやく癒え、ドイツはついに講和条約を得、第二の朝鮮にならないのだ。

リリー・ヴェヒター

ヘッダ・ツイナー

君や私のような一介の女性が
起訴された。
米国の裁判所が
自分のために開いたのだ。
殺人？ 強盗？ 放火？
当てずっぽうをしても無駄だ—
起訴状が事実として挙げているのは
「連合国兵士を疑わしくしたこと」

君や私のような一介の女性が
いったいそれをどのようにやったというのか？
この裁判になぜこれほど
人が押し寄せるのか？
なぜ米国のお歴々には
この件がそれほど厄介なのか、
なぜ、それは多くのことが起こり、
特に危険だから？

君や私のような一介の女性が
どんな罪を犯したというのか？
彼女は真実を語った。ただ、それだけだ。

彼女は警告した。

母親の苦悩、子どもたちの叫び、

恐怖と死を語った。

「ドイツが朝鮮になってはならない。

私たちに何が迫っているか認識して」と言ったのだ。

君や私のような一介の女性が

裁判にかけられている。

有罪を宣告され、幽閉された。

彼女は屈しなかった。

一介の女性、声は弱々しく

静かにはっきりと喋った—

そして何百万人の人を目覚めさせた

彼女は真実を語ったのだから。